

佳作

「ちがいを、認める」

別府市立青山中学校二年 田中 夏樹

わたしは作文が苦手だ。国語は好きだけど、作文みたいに深く考えて、自分の気持ちを表現するのは苦手。でも、友達のあの子は国語が苦手なのに、作文はスラスラ書ける。これは、私とあの子の「ちがい」だと思う。

私は運動をすることが大好きだ。でも、それより本を読んでいることの方が好きな人もいる。これも、ちがい。

私のまわりには色々な人がいる。給食をあつという間に食べ終える人、アニメやマンガにとってもくわしい人、絵をかくのがとても上手な人……。様々な個性の人達がいて、毎日がおもしろいし、楽しい。

でも、ニュースやインターネットなどで、いじめや差別のことをよく耳にする。いじめや差別は、不登校どころか、自殺にまで追いこんでしまうことがある。私は、いじめや差別はちがいを認めたり、解りあえたりできなかった時におこってしまうのではないかと思った。そんなことを考えるが、実際どこかでは、「私には関係ないな」と思ってしまった。

でも、全然そんなことはなかった。

中学二年生の一学期、私たちのクラスに転入生が来た。その人は、みんなと目の色、髪の毛の色、喋る言葉も違う、ウクライナからの転入生だった。先生から、説明はしてもらっていたが、正直どこまで聞いていいのか、どんな態度で接すればいいのか、全く分からなくてうまくやっていけるかどうか不安だった。でも、転入生は人見知りせず、みんなからの質問にも答えてくれた。それから毎日一緒に過ごした。理科や英語など、一緒に受けられる授業は一緒に受けた。言葉が通じないから、翻訳機能以外は身ぶり手ぶりで伝えるこ

とも多かつた。でも、転入生の子は、一生懸命理解しようとしてくれた。そして、クラスの人とすぐに仲良くなっていた。

私は「人種差別」という言葉を聞いたことがあった。だから、大丈夫とは思っていただけ、やっぱり少し不安だった。もし、私とその子の立場だったら目の色や髪の毛の色でいじめや差別をされないか、とても不安でこわい。転入生の子も不安だったと思う。でも、逆に、ちがいを認めて、自分のことを知ろうとしてくれていてる人が一人でもいると、うれいし心強いと思う。

ウクライナからの転入生 が来てくれたおかげで、ふだん気が付けなかった、助けあうこと、支えあうこと、そして友達の大切さに気が付けた。また、ちがいを認めて、助けあい、支えあいながら一緒に何かを乗り越えることがこんなに楽しくて、こんなに達成感があるとは思わなかった。

今の時代、色々な人がいると思う。転入生のように目の色、髪の毛の色がちがう人もそうだけど、例に挙げるとすれば、性別だ。前は、男性、女性がはっきりしていた。それが今では、男性だけど化粧をしたり、スカートをはいたりする人がいる。「自分には性別がない。」と言ってる人もテレビで見ることがある。私も、めずらしい人だなあと考えたことがある。聞いたことはあっても、実際に見たことはないからだ。でも、顔や考えていることが一人ひとりちがうように、性別も一人ひとりちがっていいんだと思う。あとは、周りの人たちが、「この人はこういう人なんだ。」「すてき。」と認められるようになることが大事だと思う。そうすれば、堂々と自分の個性を表現することができるようになると思う。

私も、人とのちがいを見つけたら、責めたり、自分の考えをおしついたりするのではなく、認めようと思う。たとえそれが小さなちがいとしても、お互いが尊重 して助けあったり支えあったりすることでよりよい関係を築いていくことができると思うからだ。